
パロディ童話集

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パロディ童話集

【NZコード】

N4150M

【作者名】

Rail

【あらすじ】

童話のパロディ集。おなじみの童話がなんだか変なことに?
明るいものからブラックなものまで。

赤頭巾ちゃん

昔々、あるところにとてもかわいらしこ女の子がいました。

彼女はいつもおばあさんからもらつたお気に入りの赤い頭巾をかぶっていたので、赤頭巾ちゃんと呼ばれていました。

ある時赤頭巾ちゃんは病氣のおばあさんのお見舞いのために、ぶどう酒とパンを持っておばあさんの家へと向かいました。

と、そこへ狼がやつてきました。

「赤頭巾ちゃん、一体どこへ行くんだい？」

「病氣のおばあさんのところへお見舞いに行くの」

そこで狼はおばあさんの家に先回つてしまつと考えました。そしておばあさんを食べ、そりは赤頭巾ちゃんも食べてしまつと思つたのです。

「お見舞いの品なんだい？」

「ぶどう酒とパンよ」

「他にももっとお見舞いを持つてこつたほうが、おばあさんは喜ぶよ」

狼は優しい聲音を作り、言いました。この先にある花畠に赤頭巾ちゃんを連れて行き、足止めをしました。この前にある花畠に赤頭巾

「うひね。ぶどう酒とパンだけじゃ物足りないわね」

赤頭巾ちゃんは何かを考え込むよつよつとしゃべった。

「 わいへ、あつちに綺麗なお花畠が 」

と、狼が言いかけた、

「 やつぱつ、これだけじゃ栄養がつかないわよね 」

しばりして、おばあさんの家をノックする人がいました。

「 おばあさん、お見舞いを持ってきたわ 」

「 まあ、赤頭巾ちゃん、ありがとう。一体何を持ってくれたの ？」

赤頭巾ちゃんはうつと笑いました。

「 ふどひ酒とパンとお肉よ。お肉はちゅうと硬いから、今からスープにするわ 」

やつして心の籠つたお見舞いのおかげで、おばあさんは元気になりました。そして赤頭巾ちゃんは立派な毛皮を獵師さんに売つて、お母さんを喜ばせましたわ。

めでたしめでたし。

白雪姫

昔々、あるところにとてもとても美しいお姫様がいました。

お姫様の名前は白雪。

白雪姫はその名の通り、処女雪のように白い肌を持ち、鮮血のように美しい赤い唇を持ち、黒檀のよつに黒い髪と瞳を持つたそれはそれは美しいお姫様でした。

しかし天は一物を「えず」といつ言葉通り、白雪姫には多大なる欠点がありました。

豪華で上品な装飾が施された城を、柳眉を逆立てた王妃が歩いていました。

「白雪！ 白雪はどこ？」…？

王妃はヒステリックに声を荒げると、何人もの侍女が慌てて彼女の周りに集まりました。

「王妃様、どうか怒りをお静め下せませ」

侍女達はなだめようとしますが、王妃の顔は一層険しくなるばかりです。

「いいえ、いいえ！ 今度こそは許しません！ あの子にはあれほど、あれほどきつく叱つたといつに！ それなのにあの子ときたら、また厨房でつまみ食いをしたのですよ！？ 来賓に出すはずの料理だったといつに！」

「あの子ももう十三を超えた、世間では立派な淑女になつてゐるはずの年齢なのです！ その上あの子はこの国の王女だと云つのに……！ それなのにあの子と来たら……！」

「そう。白雪姫は大変食い意地が張つていたのです。

厨房の料理はもとより、庭園の木の実、花の蜜、果ては狩りに出かけて仕留めた獲物を自分で捌き、その場で食すというある意味清潔しい程の食い意地の張りっぷり。

そういうわけで、ある日とびとび王妃はブチ切れたのです。

「ああ、あんなのが実の娘で、この国の跡継ぎだなんて、恥ぢらじでしかないわ。それならばいつそ、いなくなつてしまつた方が都合がいいでしょ？」「

やう思いつくと王妃は猟師を呼び出しました。

「いい」と、白雪を狩りに連れて行きなさい。森の奥の奥まで連れて行くのです！

それを聞いて猟師は震え上がりました。

「まさか、白雪姫を屠つて来いとなつしゃるのですか？」

すると王妃はかぶりをふりました。

「いいえ。実の娘にそんなひどいことをする親がいるわけないでしょう。あなたはただ、そうね。採った獲物を料理してあげなさい。そしてそれを白雪が食べている間に城に帰つてくるのです。いくらあの子でも森の奥の奥なら帰つてこれないでしょ?」

ぶっちゃけ、捨て子宣言です。

「しかしそれでは白雪姫は……」

「あの子なら大丈夫です。すでに齡が十を数えたころから山に入つては木の実や獲物を探つてきた子です。幸い今は春。絶対に死にはまへん」

いろんな意味でおかしい母親からのお墨付きです。獵師自身も密かにそうだろうと思つていましたが、口にはしませんでした。沈黙は金です。

「別に一生というわけではありませんよ。一ヶ月後には隣国の王族の方々がいらっしゃいます。その方々が帰つたら迎えに行きましょう」

つまりは、臭いものには蓋というわけですね。

そういうわけで、その数日後には獵師による白雪姫置き去り大作戦が実行されました。

その時点では誰も、一ヶ月後なぜか森に捨てたはずの白雪姫が隣国の王子の婚約者として数々の武勇伝と共に現れ、しかもその発表の場で料理を貪り食つていてることにショックを受けた王妃が卒倒す

るとは予想だにしていなかつたのでした。

おもうべくめでたしめでたし。

シンデレラ

昔々、あるとじの王子様はそれは可憐な女のお子がいました。

彼女の母は早くに亡くなり、父親は代わりに新しい女を家に引きこんだのですが、その継母や連れ子たちはシンデレラをこじめたのでした。

シンデレラは貴族の娘でしたが、まるで下女がやるような仕事をすべて押し付けられたのです。

ある時お城の舞踏会が開かれる」となったのですが、国中の女の子が招待されたにも関わらず、シンデレラは継母たちによって留守番を強制されてしまいました。

女の子といひ年齢ではない継母も張り切つて出かけました。

セーデレスもなく、泣く泣く留守番をしていたシンデレラでしたが、そこへ魔法使いがやってきてシンデレラに魔法をかけてくれました。

シンデレラは綺麗なドレス姿に、かばりやは馬車に、ネズミはイケメンの御者になりました。

セントレジス・トマホークはイケメンの御者とかぎゅうやの馬車に乗つて避
の逃避行に出で、幸せに暮りはじましたとさ。

めでたしめでたし。

ハーメルンの笛吹き男

昔、ハーメルンの町の人々は大変困っていました。町に大量のネズミが発生していたのです。

朝は走り回るネズミの足音に起こされ、昼はのべつ幕無しにネズミに仕事の邪魔をされ、夜眠ろうと寝床に入れればそこでもネズミと顔を合わせるというぐらい。ネコをけしかけようにも多勢に無勢、逆にネズミに襲われる始末。毒入り団子も焼け石に水、ついには町長がネズミ退治に懸賞金を掛けるほどでした。

さて、そんなあるときハーメルンの町に奇妙ないでたちの男がやつてきました。

道化師のような格好をした男は、自分ならば町中のネズミを退治してみせると言いました。

「本当だろうか」

「法螺を吹いているんじゃないかな?」

「とりあえずやらせてみよう」

町長たちは話し合いをしました。誰一人として男の言い分を信じていませんでしたが、ネズミの害には参つていたので藁にもすがる気持ちで男に頼むことにしました。

「もしあなたがネズミを退治してくれるならば、私たちはあなたにたくさんの報酬を支払いましょう。どうか町を救ってください」

男はうなずくと、町の中央広場に向かいました。

広場に立つた男は、懐から変わった形の笛を取り出して吹き始めました。

するとどうでしょう。不思議なことに、町中のネズミたちが男の周りに集まり始めたのです。

集まつたネズミは一様に笛の音に耳を傾けていました。

町中のネズミというネズミが集まるごと、男は笛を吹いたまま歩き始めました。するとネズミたちも大人しく男の後をついて行きます。そしてヴォーザー川までたどりつくと、男は川のほとりで先ほどとは違つた音楽を奏みました。ネズミたちはそれを聞くと、次々と川へと飛び込んでいきます。

そして町中を跋扈していたネズミは一匹残らずヴォーザー川でおぼれ死んだのでした。

男は意氣揚々と町へと帰りました。そして町長の元へと戻ると、報酬を要求しました。

しかし町長たちは男を見ると、まるでけがらわしいものを見るかのような態度をとりました。

「報酬？ 何のことだ。私はお前のような人間は知らないぞ」

「笛でネズミを連れ出した？ そんなこと出来るわけがないだろう！」

そう、町長たちは男に報酬を払うのが惜しくなつたのです。町からネズミが一匹もいなくなつた今、自分たちがしらばっくれてしまえば報酬を支払わなくとも良いと思つたのです。

男は激怒しました。

「約束が違うだろ？ ネズミを退治すれば報酬を支払うと言つたじゃないか！」

しかし町長たちは男の要求を突っぱね、棒で打ちすえて町の外へと男を追い出してしまいました。

それから一ヶ月後のことです。ハーメルンの町に奇妙な風体をした男が笛を吹きながら現れました。

男の後ろには、まるで夢遊病にでもかかつたかのような娘たちがたくさんついてきました。どの娘も醜く、性格が悪そうな顔をしていました。

男は広場にたどりつくと、それまでとは違った音を奏で始めました。

するとどうでしょう。ハーメルンの町中といつ町中から、器量よしの娘が集まつてきました。娘たちは笛の音に耳を傾けています。町中の美しい娘が集まると、男は笛を吹いたまま歩き始めました。すると器量よしの娘たちは男の後をついて行きます。逆に男が連れてきた醜い女たちは誰もついて行こうとしません。

町の男達は必死で娘たちが出て行くのを引きとめようとしたが、娘たちはぼんやりとした顔をするばかりで一向に足を止めません。

「おい、止める！ 娘たちをどこに連れていくつもりだ！」

町長が男の前に立ちはだかりました。男は笛を吹ぐのを止めると、やれやれと首を振りました。

「この娘たちが勝手についてくるだけだ。笛で娘たちを連れ出すなんてできるわけがないだろ？..」

そう言つと、男は笛を吹いて再び歩き始めました。

そうしてハーメルンの町からは器量よしの娘がいなくなり、代わりに醜く、性格の悪い娘ばかりが増えたのでした。

いなくなつた娘たちはどこへ行つたのかつて？
実はあちこちの町に行つていたのです。

一か月前、ハーメルンの町を追い出された男は各地を回りました。
そしてあちこちの町で契約をしたのです。

醜くて性格の悪い娘を連れてていき、器量よしの娘を代わりに連れてくる、と。

契約は見事に果たされ、笛吹きの男は莫大な富を得たのでした。
そして娘たちもそれぞれの町で大切にされ、幸せに暮らしたのでした。

めでたしめでたし。

裸の王様

あるところに王様がありました。

その王様は大変オシャレ好きで、あちこちから仕立て人を呼び寄せては新しく自分の服を仕立ててもらうのが日課でした。王様は豪華な服を作らせて着るのが大好きでした。

ある時王様の元に一人の仕立て屋がやってきました。

仕立て屋は王様を騙してお金を巻き上げようとたくさんだのです。王様の前に出た仕立て屋は、何もない手にさも布を持っているかのように差し出して言いました。

「王様、世界一美しい布を持つてまいりました」

王様は仕立て屋が何も持っていないことに首を傾げました。
仕立て屋は続けます。

「この布は馬鹿には見えない糸から作った馬鹿には見えない布で、このようにとても美しく肌触りがよいのです」

「ふむ。馬鹿には見えぬのか」

「さようでござります」

恭しく答えながら仕立て屋はこう考えていました。

今まで彼が会ってきた貴族や王様は皆見栄張りで、自分が馬鹿だと認める人間は一人もいませんでした。きっとこの王様も大臣たちも、馬鹿には見えないと言われたなら自分が見えないとは決して言わないだろう。そして美しい布と言われたらオシャレ好きな王様ならば、たとえ自分が見えなくとも仕立てるよう命じるだろう、

と。

しばらくは戸惑ったような沈黙があつたのですが、やがて大臣たちは口々に仕立て屋の持つてきた布を褒め始めました。誰も自分が馬鹿だと思いたくなかったのです。

しかし仕立て屋に誤算がありました。

「ふむ。ならば余には見えぬな」

王様はしつかり自覚のある馬鹿だったのです。

そして王様は好奇心旺盛な馬鹿でした。

「馬鹿には見えぬと申しておつたが、それはどこまでが馬鹿となるのだ？ 仕事馬鹿にも見えぬのか？ それとも単純に頭が悪いと見えぬのか？ 言葉も喋れぬ幼子には見えぬのか？ 余は物覚えの悪い馬鹿だが、物覚えが悪ければ見えぬのか？ それとも頭の回転か？ そもそも馬鹿に見えぬなら、余が仕立てた服を着たら舞踏会で何人かは余の裸を目につくことになるのではないか？ 貴族は頭の足りない連中も少なくない」

仕立て屋は内心で悲鳴をあげました。まさか王侯貴族で自分を馬鹿だと断言する人間がいるとは、そしてここまで質問できるとは思わなかつたのです。

王様は新しいおもちゃを前にした子供のように興味津津の様子です。一国の王様の質問に答えられないなどという不敬を、一介の仕立て屋がするわけにはいきません。

その後、じどうもどりになつた仕立て屋を怪しんだ大臣たちが問い合わせ、彼らの企みは明らかになりました。仕立て屋は捕まり、数日後には処刑されたのでした。

聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥。無知の知といつのは時として詐欺師に勝るときがあるのでした。
めでたしめでたし。

桃太郎

昔々、あるとくにむけたおじこさんとおばあさんとが住んでいました。ある日、おばあさんが川へ洗濯へ行くと、川上から大きな桃がどんぶらつゝじ、どんぶらつゝこと流れきました。

これはきっと神様の贈り物に違いないと呟いたおばあさんはその桃を持つて帰り、おじこさんと一緒に食べることにしました。

桃を食べるといぢりしたことが、一口食べるとおじこさんもおばあさんも少しずつ若返っていました。

そして桃をすっかり食べ終えたころには、おじこさんもおばあさんも若かりし頃の姿に戻っていたのでした。

おじいさんは考えました。

自分はかつて村一番の美丈夫と呼ばれていた男だ。村一番の美女と言わされたおばあさんと結婚したが、おばあさんは性格がよろしくなく、子宝にも恵まれなかつた。きっとおばあさんと結婚したのは間違いだつたに違ひない、と。

おばあさんも考えました。

自分はかつて村一番の美女と呼ばれていた女だ。村一番の美丈夫

と言われたおじいさんと結婚したが、おじいさんは甲斐性がなく貧乏で、子宝にも恵まれなかつた。きっとおじいさんと結婚したのは間違いだつたに違ひない、と。

一人は揃つて自分たちの結婚を間違いだつたと思いましたので、若返つたこともあつて早々に離縁してしまいました。

そして若返つた二人はそれぞれ違う町へと出て、自慢の美貌を生かして伴侶を見つけることが出来たのでした。

若返つたおじいさんは若くて氣立てのよい娘と結婚することができました。しばらくすると子宝にも恵まれ、玉のよつな男の子が生まれました。おじいさんはその子供に桃太郎と名付けました。

若返つたおばあさんは若くて甲斐性のある男と結婚することができました。しばらくすると子宝にも恵まれ、玉のよつな男の子が生まれました。おばあさんもその子供に桃太郎と名づけました。

月日は流れ、二人の桃太郎はそれぞれ強い子供になりました。そして同じ時期に、鬼が島に鬼退治にいきたいと両親に申し出たのでした。

そして二人の桃太郎は餞別としてきび団子を貰い、鬼が島に鬼退治へと出かけたのでした。そして一人とも道中で示し合わせたように犬、猿、雉を家来として連れて行つたのでした。

さてさて、いよいよ鬼が島に降り立つた桃太郎は鬼たちに向かつて名乗りをあげました。

「我こそは日本一の桃太郎！　お前たちを成敗しに来た！」

「我こそは日本一の桃太郎！　お前たちを成敗しに来た！」

同じ台詞が二か所から聞こえ、鬼たちは驚きました。

驚いたのは桃太郎達も同じです。まさか自分と同じことを名乗る人間がいるなんて思つてもみなかつたのですから。

「やいやい、お前は何者だ。日本一の桃太郎とは私のことだ！」
「何を言つ偽物が！　我こそが日本一の桃太郎だ！」

二人の桃太郎は互いに睨みあいます。彼らの家来である犬、猿、雉も睨みあつていました。

「私が本物だ！　真似をするな！」
「それはこっちの台詞だ！」

二人はしばらく言い争つていましたが、やがてどちらが本物かを決めるための勝負を始めてしました。彼らの家来である犬、猿、雉もどちらが本物の桃太郎の家来であるか証明するために勝負をすることになりました。

一人の桃太郎は強く、実力が拮抗していました。きび団子を食べた家来たちも同様です。

一方鬼が島の鬼たちは桃太郎たちの強さを目の当たりにして震えあがりました。そして自分たちでは到底かなないと諦めた鬼たちは、二人が勝負をしている間に財宝やら家財をまとめ、すたこらさつさと逃げてしまいました。

そうして桃太郎が気付いた時には鬼が島には鬼の一匹、反物の一つも残つていませんでしたとさ。めでたしめでたし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4150m/>

パロディ童話集

2010年12月14日21時33分発行